3 学期分のオンライン授業に関するアンケート結果

ヴァンバーレン　ルート
（日本語教育部門 FD 委員長）

要　旨

新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、筑波大学 CEGLOC 日本語教育部門での授業がすべてオンラインで開講されるようになった 2020 年度春学期から受講者の協力を得て記入してもらった 3 学期分のアンケート結果を本報告で比較した。オンライン授業への参加の際、技術的な問題が少なく、全体的に同期型のオンライン授業が好評であるものの、パンデミック終息後授業形態（オンラインや対面）について気持ちが揺らいでいる受講者が多いことと、オンライン教材の開発が不可欠であることなどが分析結果として挙げられる。

【キーワード】オンライン授業　留学生　アンケート結果比較　2020 年度～ 2021 年度

Survey Results of Three Semesters of Online Classes

VANBAELEN Ruth
JLED FD Committee Chair

【Abstract】 Since the spring semester of 2020, due to the Covid-19 pandemic, all classes at the Japanese Language Education Division of CEGLOC at the University of Tsukuba have been offered online. During these three semesters, the students completed a survey concerning the online situation. There were few technical glitches, so synchronous online classes were well-received by the students. However, the analysis of the results indicates that students waver in choosing the preferable class format after the pandemic and that the development of online teaching materials is essential.

【Keywords】 Online classes, international students, survey results comparison, AY2020~2021

1．はじめに

本報告では、グローバルコミュニケーション教育センター（以下 CEGLOC）日本語教育部門が 2020 年度春学期・秋学期および 2021 年度春学期に実施したオンライン授業に関する受講者へのアンケートの結果を分析し、結果の比較を行い、授業形態に対する受講者の意見や課題について論じる。本稿で取り扱うアンケートは筑波大学が教育情報システム TWINS（Tsukuba Web-based Information Network System）で実施する「授業アンケート」とは異なる内容となり、実施するようになった経由および形式に関する詳細はヴァンバーレン（2020）を参照されたい。

ここ 2 年半の間、CEGLOC 日本語教育部門での受講者推移は表 1 の通りである。通常の対面授業の 2019 年度春学期・秋学期、そしてオンライン授業の 2020 年春学期・秋学期および 2021 年春学期の受講者数の推移および受講者が履修した平均コマ数（日本語教育部部門事務取りまとめ）が表示されている。パンデミックの中では、日本政府（外務省 2021）の入国制限によって、多くの留学生が入国できない状況となったため、2020 年度春学期から自国から日本語科目を受講可能であるオンライン授業を通して日本語教育を提供することとなった。受講者数が大きく変動しているが、授業形態と関係なく平均履修コマ数が変わらず同じ水準を保っていることがわかる。換言すれば、履修形態が変化しても、学生が大学の所属身分さえあれば、履修する科目数そのものが変化しないことを指している。オンライン授業の需要が明確であるともいえよう。

表 1　CEGLOC 日本語科目 * の受講者数および平均履修コマ数の推移 **

	対面授業	対面授業	オンライン授業 第 1 学期	オンライン授業 第 2 学期	オンライン授業 第 3 学期
	2019 年度 春学期	2019 年度 秋学期	2020 年度 春学期	2020 年度 秋学期	2021 年度 春学期
受講者数	449	612 (△ 163)	314 (▼ 298)	214 (▼ 100)	343 (△ 129)
平均履修 コマ数 ***	3	3	3	3	3

*対象コース (7): 補講日本語･総合日本語･外国語としての日本語･英語プログラム日本語･予備教育・キャリア支援日本語・Japan Expert 日本語（秋学期のみ開講）

** （）内の数字は前期比、***コマ数：原則として 6 コマが履修可能な上限数

しかし、入国できた受講者とそうでない受講者にオンラインという授業形態で学習してもらううえ、教育の質を保つこと必要がある。そのために本アンケートが実施され、結果が課題を示唆し改善点にたどり着くと考える。

2．方法

2020年度春学期・秋学期、2021年度春学期に匿名のGoogle Formで日英中の3言語でアンケートが用意され、担当教員が受講者に記入への協力を呼びかけた。回答期間はコースによって異なるが、成績入力前に締め切られた。初回アンケートでは、学生が受講する各科目に対して10分程度のアンケートを記入したが、科目間に項目の回答に大きな差がなかったため、受講者の負担を減らす目的で、2回目のアンケートからは受講する科目をリストアップする項目を設け、アンケートそのものを1回のみ回答する方法に変更した。同様に、受講者が課題を感じない項目に関しては随時に削除したり、項目の文言をより明確にしたりし、内容を調整してきた。さらに2021年度春学期に「望ましい授業形態・開設希望科目・学習スタイルの変化」の3項目を新設し、これらの結果についても結果および考察の節に触れる。

3．結果および考察

本節では3学期分のアンケート結果を紹介し考察する。

3．1　回答率

アンケートへの回答が必須ではないが、毎学期5割前後の多くの受講者から協力を得られているため（表2）、以下紹介する結果が各学期の受講者の全体像を反映していると考える。

表2　アンケート回答率

対象学期	回答率
第1回：2020年度春学期	54%
第2回：2020年度秋学期	59%
第3回：2021年度春学期	48%

3．2　受講場所

表3に受講者の受講場所を示す。2020年度春学期には、85％が日本在住で、16％が自国から授業を受講していた。学期の途中から入国した学生はいなかった。2020年度秋学期には、受講者の15％が自国での一時待機のうえ、学期中に入国し、受講場所が変化したが、2021年度春学期には途中で入国する学生がほぼゼロで、3割以上が自国にいながら日本での留学を経験していた。この数字が日本政府の入国規制を反映しながらも、自国から筑波大学での科目受講を可能とするプログラムが定着しつつあることを示している。

表 3　受講場所

	2020 年度春学期	2020 年度秋学期	2021 年度春学期
日本での自宅	85%	68%（▼ 17%）*	67%（▼ 1%）
海外での自宅	16%	17%（△ 1%）	32%（△ 15%）
一部海外、 一部日本での自宅	0%	15%（△ 15%）	1%（▼ 14%）

*（）内の数字は前期比

3．3　使用機器および接続方法

使用機器および接続方法によって快適に授業に参加できるか否かが左右される。学生の使用機器および接続方法を表 4 にまとめる。

表 4　使用機器および接続方法

	2020 年度春学期	2020 年度秋学期	2021 年度春学期
使用機器			
カメラ付き PC のみ	73%	66%	74%
様々な機器の併用*	18%	25%	22%
カメラ無し PC のみ	**4%**	**2%**	**2%**
タブレット端末のみ	**4%**	**5%**	**2%**
スマホのみ	**1%**	**2%**	0%
接続方法			
有線	8%	7%	-
Wi-Fi	92%	93%	-

*必ずカメラが搭載された機器を対象とする

3 学期とも、学生の多くがカメラ付き PC を所有し使用していたが、パンデミック元年ともいえる 2020 年度の両学期にはそれほどユーザーフレンドリーではないカメラ無し PC やタブレット端末、スマホのみ使用している学生が合わせて 9%いた。タブレット端末やスマホのみの使用が、長時間使い続ける場合や文章を書く必要がある授業に適していない上、カメラ搭載のない PC は教員やクラスメイトとのつながりの妨げとなると考えられる。表 4 からわかるように、2021 年度春学期にはこれら 3 機器のみの使用が 4%にとどまり、オンライン授業の時期も長くなり、より使い勝手の良いと考えられる機器を使用する学生が増加した傾向になったようである。

同じ表 4 では接続方法も表示されている。2020 年度春学期秋学期とも Wi-Fi 接続が圧倒的に多く、日本語教育部門として干渉できるものでもなく、ヴァンバーレン（2020）で課題として挙げられた通信速度や通信量が接続方法とそれほど関連がないため、2021

年度から本項目をアンケートから外した。

3．4　受講に当たって

本節では教科書購入、予習・復習時間およびクラスメイトとのつながりについて記述する。これら3つは授業形態と関係なく授業内容を十分に身につけるための重要な要因である。しかし、平常時の対面授業と異なってパンデミック中のオンライン授業に次のような課題が予測できたためこれらをアンケート項目として設置した。それはまず、入国できない学生にとって教科書購入が困難で十分に教材が手に入らないこと、そして、オンライン授業形態によって人との接触が制限される中、対面授業よりも各自で予習・復習のペースを掴む努力が必要であるにもかかわらず、ペースが十分に掴めない可能性があることである。最後に、クラスメイトと授業内交流や授業外でのコミュニケーションで学習内容を深めるチャンスが減る可能性が大とのことである。状況を把握して、教員がどのように工夫できるかのヒントを得ることがこれら3項目の目的である。

図1は**教科書購入**の可否についてまとめたものである。購入できた受講者が各学期75％程度である。日本入国済みの受講者（85%、68%、67%）とほぼ一致し、購入が困難だった受講者のほとんどが海外在住である。2021年度春学期に変化が少し見えた。出版社の協力を得たおかげで、海外にいる受講者でも購入が可能になった人が増えたほか、教科書を使わないなどの教員の工夫で、「購入できなかった」回答が15％にとどまった。上記にあげた教材が手に入らないことが徐々に解決されつつあるといえよう。

受講者が**予習・復習時間**を管理できているかどうかが本節の次の項目で、図2が予習・復習時間についてまとめたものである。対面授業とほぼ同じぐらい時間をかけて予習・復習する受講者が2020年度春学期と秋学期に5割強だった。2020年度秋学期には、対面授業より予習・復習時間が短いと回答した人が3割前後だったが、「同じ程度の時間」と「より長い時間」を合わせると7割の受講者がしつかりと取り組んでおり、ペースを掴んでいることがわかり、大きな問題はないと判断し、2021年度春学期に項目を削除した。

図3は**クラスメイトとのつながり**についてまとめたものである。授業のオンライン実施の適切さについて聞いたところ、2020年度春学期と秋学期にそれぞれ98％と96％が適切だという肯定的回答を得られ、2021年度春学期に項目を削除した。しかし、オンライン実施そのものに対しての肯定的な回答がある一方、クラスメイトとのつながりに関する回答はそこまで肯定的ではない。留学の目的は勉学だけではなくネットワーキングでもあるので「オンライン留学」で十分に目的を果たせない可能性があるが、「あまり・全然つながりできなかった」の割合が2020年度春学期から秋学期にかけて10％程度減るという変化があり、2021年度春学期も同じ水準を保っている。ヴァンバーレン（2020:

52）にも挙げた受講者 1 人の「授業開始前の自由会話時間を増やす」という指摘があり、その後、授業前でもアクセスできるように Zoom 待機室を無効にするという工夫によってコミュニケーションが増えたかもしれない。また、オンライン授業が適切であるという回答を考慮して、受講者が受講時にこれ以上のつながりを望めないと受け入れたうえでの回答だった可能性もある。更なる追加調査が必要である。

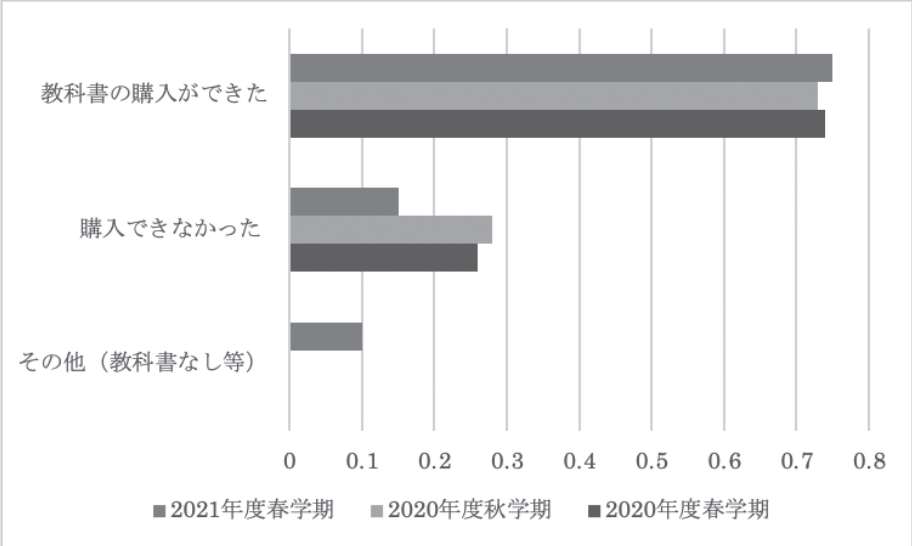

図 1　教科書購入の可否

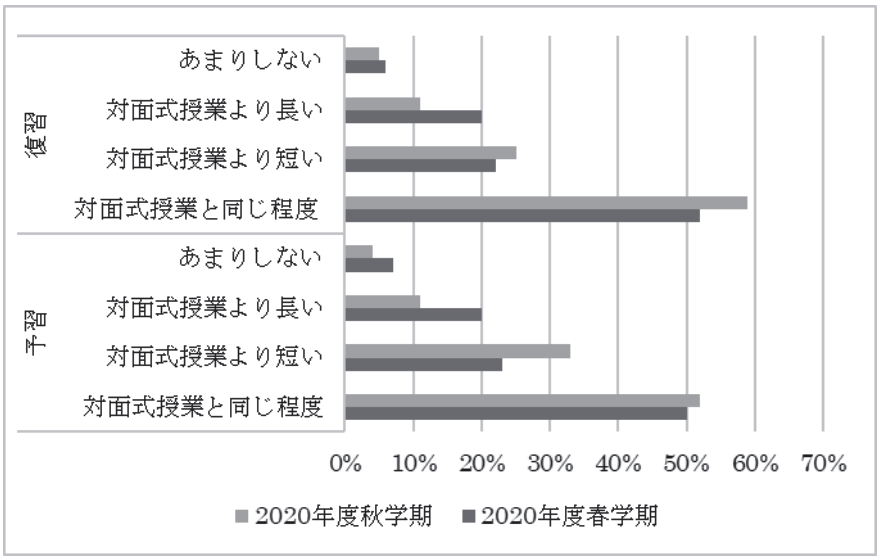

図 2　予習・復習時間

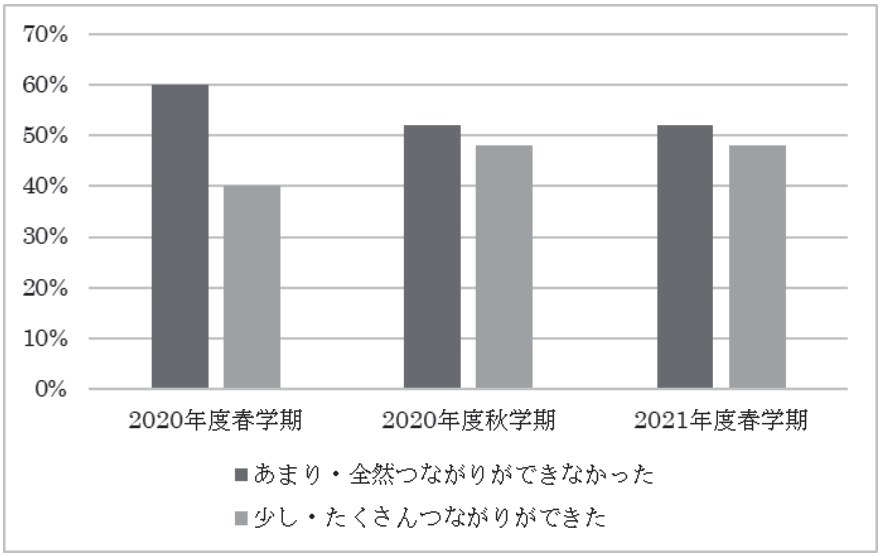

図3　クラスメイトとのつながり

3.5　望ましい授業形態について

3.4節では、すでにオンライン授業の適切さに触れたが、本節では授業形態の様々な側面について受講者の意見をまとめて考察する。具体的に①対面式授業とオンライン授業とのバランス、②オンライン授業のスタイル（同期型 vs. 非同期型）や③適切なプラットフォームについて記述する。海外にいて時差の問題を抱え、オンライン授業参加のモチベーション維持が困難な学生がいるため、もっとも望ましい形態を把握することが重要である。また、パンデミックが終息しても、2019年度当時の対面式授業100％時代に完全に戻ることはおそらくない。今後のためにも望ましい授業形態が大事な検討項目である。

①対面式授業とオンライン授業とのバランス

パンデミッグが長引く中、授業の望ましい形態が対面式かオンライン式かという単純な両極端な選択ではなくなってきている。少人数であれば、感染症対策を取りながら対面式授業が可能な場合もあれば、自国から受講する学生がいれば、完全にオンライン式になることが多い。しかし、今後、混合した授業形態が考えられるため、現在の受講者がそれについてどう考えているか調査することにした。まず、HiFlexやハイブリッドスタイルともいう「混合した授業形態」について説明を加える。入国できた人が教室で対面の形で、自国から受講する人がオンラインで同じ授業に参加する形態をHiFlexと呼ぶ。キャンパスにいても様々な理由で教室に行かれない学生も前述の形態なら授業参加が可能である。理由として体調不良、次の時限にオンライン授業があるためキャンパスと自

宅の往復が不可能、などが挙げられる。その一方、授業の一部を対面、一部をオンラインで実施する形態をハイブリッドと呼ぶ。それぞれのスタイルの教員への負担についての考察が本報告の範囲外であるが、まず受講者が望む対面式授業 vs. オンライン式授業のバランス（図４）について訪ねた。図４では、学生の気持ちが揺らいでいることがわかる。2020 年度春学期には、おそらく目新しさ・新鮮さで「対面よりオンライン」を好む学生が多かったが、秋学期になると「対面 100%」や「オンラインより対面」を選択する受講者が増えた結果となった。しかし、「半分半分」を選択する人が各学期に 3 割前後いるので、2021 年度春学期に、選択肢を変更した。その結果を図５にまとめた。科目の種類や特色を考慮してもらい、一部の科目そして科目の一部について回答してもらった。一部の科目を対面、もしくはオンラインで実施するというのはたとえば「話す」クラスを対面、「書く」クラスをオンラインで実施するという意味で、科目の一部を対面、一部をオンラインで実施するというのはたとえば「話す」クラスの会話導入部分をオンライン、練習部分を対面で実施するという意味である。得られた回答には、授業を完全にオンライン（オンライン 100%）が 25%、完全に対面（対面 100%）が 22％となりさほど大きな差が表れなかった。しかし、科目の種類や特色を考慮して判断した学生が合わせて 53％となり、学生がオンラインと対面のそれぞれ良いところを維持してほしいようである。それぞれの選択について、自由回答で理由を書いてもらい、表５でいくつか紹介する。

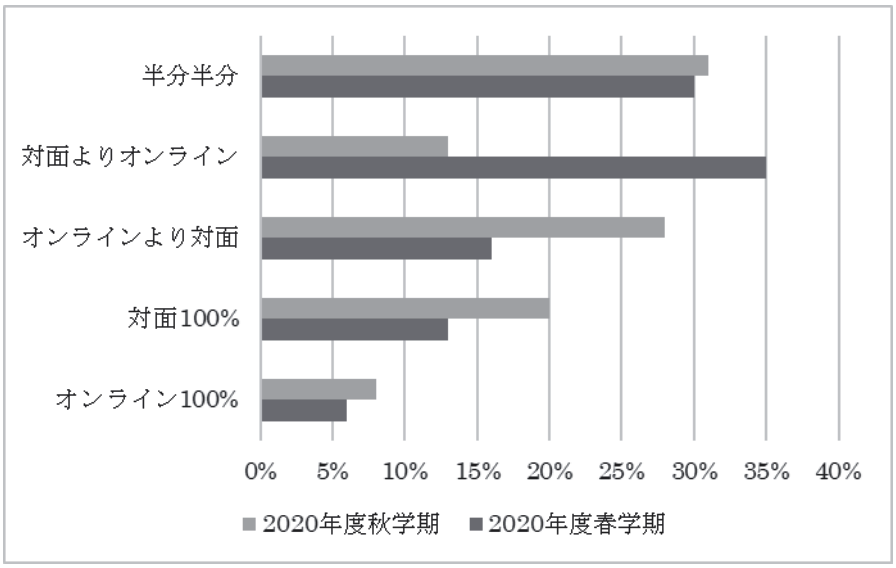

図４　望ましい授業形態（対面式 vs.　オンライン式のバランス）

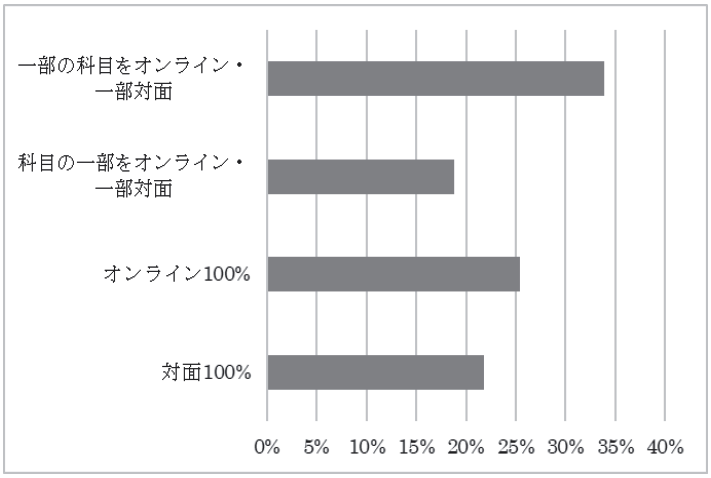

図5　望ましい授業形態（科目の種類や特色を考慮）（2021年度春学期実施）

表5からわかるように、受講者同士で意見が必ずしも一致しているわけではない。たとえば、両極端の対面式授業100％やオンライン式授業100％のどちらかを選択した回答者の中で、対面式授業を選択した理由として「効率がいい」と説明する人がいる。その反面、表現が異なるが内容が類似した「時間の余裕ができる」という人がオンライン式授業を好む理由として挙げている。また、科目内もしくは科目間に授業形態の区別があった方がいいという項目を選択した人のうち、「漢字のクラスなら対面式授業がいい」という受講者と「オンラインでも問題ない」という受講者がそれぞれいる。

表5　望ましい授業形態（理由）

対面100％（13％→20％→22％）*	**オンライン100％（6％→8％→25％）**
・効率がいい ・通信速度の問題がない ・もっと真面目に授業を受けることができる ・集中できる ・練習できる相手がいる ・クラスメイトと交流できる	・時間の余裕ができる ・便利 ・来日できなくても受講可能 ・顔を見せなくてもコミュニケーションができて、ストレスが少ない ・感染のリスクがない　等
一部の科目を対面・一部の科目をオンライン（34％）**	**科目の一部を対面・科目の一部をオンライン（19％）**
・交流の多い科目は対面、そうでない科目はオンライン ・自分のスケジュールに合わせることができる ・漢字の授業は「ペンと紙」の練習がいいので対面 ・話す＝対面、漢字や聞く＝オンライン　等	・学生間、また先生との交流を促進することができる ・ディスカッションは対面のほうがいい ・学期の始まりが対面でできるといい ・理論（文法など）の部分はオンライン、演習は対面　等

*括弧内の数字は2020年度春学期・秋学期、2021年度春学期の結果を示す。
自由回答欄に挙げられた理由は2021年度春学期のみの項目である。
**括弧内の数字は2021年度春学期の結果を示す（2020年度春学期・秋学期に実施なし）。

さらに、すべての科目を「学期の始まりだけでも対面でできるといい」という案が提出された。3.4 節で挙げたクラスメイトとのつながりを深めるためにも非常に有効な授業の進め方ではあるが、感染状況への考慮や入国状況への配慮が必要だという課題が残る。

上記の結果から、授業形態が受講者個人の好みと各科目の内容によって大きく左右され、日本語教育部門が今後これらをどのように調和できるか大きな課題であろう。

②オンライン授業のスタイル

2021 年 9 月現在、筑波大学では講義形式の授業を中心に多くの科目が非同期型（オンデマンド）で開講されている。一方、語学学習の教育効果を考慮し、CEGLOC では科目のほとんどが同期型（リアルタイム）で実施されている。第 3 回アンケートの新項目として、語学教育の適切なオンライン実施方法について受講者の意見を聞くこととし、その理由についても書いてもらった。その結果を表 6 にまとめた。回答者の 9 割が、リアルタイムの授業スタイルが良いと回答している。オンデマンドを好む受講者数は 5％にとどまり、残りの 5％は混合型や時差の関係で参加できない学生のため同期型授業の録画を共有することなどが良いと回答した。

同期型を選択した理由として、教員に質問したり、授業中に交流や練習ができたりすることが挙げられている一方で、非同期型を選択した理由として、時差と関係なく受講が可能であることや復習が可能であることが挙げられた。得られた割合（90％）および理由からは同期型が適切であると判断できるが、今後履修スタイルがさらに多様化することを考慮すれば、非同期型の授業設置が必要とは言わないまでも、現在の教材提供が十分であるかを検討すべき課題となる。さらに、学習者が自律学習できるようなオンライン教材の開発が適切な授業スタイルと大きく関係していると考える。

表 6　同期型 vs.　非同期型および選択の理由

同期型が望ましい（90％）	非同期型が望ましい（5％）
・教師に質問ができる ・練習ができる ・交流ができる ・その場で修正してもらえる（発音など） ・受講者の反応によって授業の調整ができる 等	・自分のペースで受講できる ・繰り返し聞いたりすることができる ・復習できる ・漢字クラスならインターアクションが不要 ・時差と関係なく受講が可能 等

③適切なプラットフォーム

日本語教育部門が語学学習のプラットフォームとして Zoom が適切であると判断し、オンライン授業が開始した 2020 年度春学期当初から Zoom を使い続けている。専門科目がほかのプラットフォームで実施されることもある中、語学学習において Zoom の

適切さについて、受講者の78％はZoomが適切であると回答した。その他、Microsoft Teams（14％）やGoogle Meets（1％）が挙げられ、特に好みがない（7％）と合わせても2割前後にとどまり、プラットフォームを変更する必要性はない結果となった。

3．6　開設希望科目について

オンライン授業のスタイル（3.5節の②）では、自律学習用の教材開発の必要性に触れたが、状況をより細かく把握するために、2021年度春学期のアンケートでは受講して好評だったオンライン授業、そして続けて開設を希望する科目もしくは新設してほしい科目（以下合わせて「開設希望科目」とする）について調査した。

①好評だった科目

本項目は2021年度春学期に関するのみの内容である。自由回答・複数回答可の設定で回答者の75％から回答を得られた。複数回答可、そして技能別の開講科目数が均等ではないため単純にパーセンテージを示すことが不可能であるため、結果を回答数の多い順に、そして技能別に受講者の好みの指標としてのみ示す。順に、話す（43回）、聞く（28回）、書く（26回）、文法（20回）、読む（14回）、活動（11回）、漢字（10回）、理解（6回）、面接（2回）、BTJ運用（2回）、メディアリテラシー（2回）、連絡コミュニケーション（2回）と、「話す」が圧倒的に多かった結果となった。

②開設希望科目

本項目も①と同様、第3回アンケートのみに実施した項目であり、複数回答可の設定のため、単純にパーセンテージを示すことが不可能で、結果を回答数の多い順に、そして技能別に受講者の好みの指標としてのみ示す。順に、話す（53回）、ビジネス日本語（24回）、アカデミック日本語（22回）、文化（16回）、漢字（11回）、書く（13回）、文法（10回）、読む（10回）、聞く（7回）、旅行（4回）と①の好評だった科目と同様に「話す」が圧倒的に多い結果となった。語学学習の成果をより容易に感じることができる「話す」が圧倒的に多かったことは駆くべきことではない。しかし、開設希望科目の中で、注目すべき結果がビジネス日本語、アカデミック日本語、文化の3つの科目群に集中している。ビジネス日本語として具体的に就職面接対策やメールの書き方、社内での敬語、JLPT対策などが挙げられた。アカデミック日本語として、具体的に論文を書くことや専門用語、発表の仕方、ディスカッション、入試面接対策などが挙げられた。文化として、具体的に歴史や文学、音楽、礼儀、ドラマやアニメなどが取り扱ってほしい内容として挙げられた。

ビジネス日本語として希望されている内容の多くがすでに留学生の大学での身分に問

わず受講可能な「キャリア支援日本語」(春学期秋学期とも C モジュールに開講) で取り扱われているが、当コースの知名度を上げる必要があると感じると同時に、留学生が日本での就職を視野に入れていることを表している結果であろう。

アカデミック日本語に関する希望が留学生の日本の大学 (院) でのキャリアへの切実な思いの表示となっていると考える。一部の要望がすでに現在の科目に取り扱われているが、より充実した内容提供が課題だと感じる。

また、文化に関する開設希望科目は学習者が授業を通して日本語のそれぞれの技能を身につけるだけではなく、日本の習慣などにも興味を持ち、語学学習と同時に、より実践的で包括的な形で学習したいことを表している。アカデミック日本語と同様、すでに一部が提供されているが、さらにプロジェクトベースなどの形で授業内容の充実を考える必要があろう。

3.7　学習スタイルの変化について

オンライン授業への移行によって対面式授業と比較して語学学習スタイル に変化が生じたのか、今後の教材開発の参考のため、2021 年度春学期アンケートに学習スタイルの変化を新項目として設置した。回答が自由記述であるためここでは結果を 3.6 節と同様、パーセンテージで表示するのではなく、類似している回答をまとめた。アンケートの項目の説明が不十分だったために、本項目を誤解した学生もいた。そのため、学習スタイルの変化についての回答ではなく、上達を成し遂げたスキルの回答が多く見られた。この点を念頭に置きながら、結果を記述する。まず、上達を成し遂げたと感じたスキルについての結果を表 7 に、学習スタイルの変化についての結果を表 8 に紹介し考察する。

3.6 節で取り上げた好評だった科目や開設希望科目では「話す」が圧倒的に多く、人気科目ではあるが、表 7 の結果、上達を成し遂げたと感じるスキルとして話すが聞く・書く・読むより少なく報告されたことがわかる。本項目が上達したスキルについて直接聞いたものではないため、正確に判断できない暫定的な数字で慎重に扱う必要ではあるが、興味深い結果である。この結果がオンライン授業の影響によるものなのか、今後追跡する価値がある。

表 7　上達を成し遂げたと感じるスキル

上達を成し遂げたと感じるスキル	回答数 (述べ実数)
聞く	25
書く	18
読む	17
話す	15
タイプを打つスピードや正確さ	8

表８　学習スタイルの変化

類似する回答	肯定・否定、＊	人数
変化がない・少ない		32
対面授業の経験がないから判断できない		19
全体的に練習の量が少ない	-	7
自律学習できるようになった	+	7
ストレスが少ない（例：自分のペース）	+	6
手書き・漢字の書き方ができなくなった	-	5
集中できない	-	3
より簡単に楽することができる（キーボードの予測機能）	-、＊	3
さぼるのがより簡単になった	-、＊	2
オンライン辞書へのアクセスが簡単	+/-、＊	2
集中できる	+	1
授業外の各自の工夫がより重要	+/-	1
内容の定着度に対する責任が減少	-、＊	1

表８が学習スタイルの変化に関する類似したコメントを多い順にまとめたものである。変化がないもしくは少ない回答（32）が最も多くみられ、その次に対面授業の経験がないから判断できない回答（19）が多かった。上記の２つ以外に、回答者が肯定的もしくは否定的な考えを表すコメントを提供している場合、それぞれ「＋」か「－」で、判断が肯定的でも否定的でも捉える場合「＋／－」で「肯定・否定、＊」列に表示している。同じ列に、「＊」を付加したコメントは、非常に正直な回答だと感じ、まさしく表面化しにくい学習スタイルの変化を表すものである。

まず、全体的に多かった否定的なコメントを考察する。練習量の少なさ、手書き問題、集中力低下が主に指摘されている。この指摘はオンライン授業によって受講者が受け身となる傾向を示す。表７ではタイプ打ちが向上した回答者が８名いる半面、手書きが思うようにできなくなっていると回答した学習者が５名いる。手書きによって勉強内容の定着度合が影響されるかについて追加調査が必要だが、内容やクラスレベルによって、手書きの課題を画像化やPDF化したうえでの提出を認めることが練習とつながるだろう。しかし、ファイル形式によってコメント追記や修正・添削が難しく、教員の負担が増える点への配慮も必要であろう。

続けて、肯定的なコメントを取り上げる。通学に時間が取られず、自分のペースで学習が可能であるという回答や、学習スタイルの変化によりストレス減少がもたらされるため、自律学習につながるという指摘が得られた。遠隔で、そして自律学習の形で語学学習を希望する学習者が今後もいると想定できるため、肯定的なコメントも否定的なコ

メントも考慮したオンライン教材の作成および提供がさらに重要になるであろう。

次に、数としては多くないが、判断が肯定的でも否定的でも捉えるコメントについて簡単に触れる。「オンライン辞書への容易なアクセス」が知らない単語や表現を調べるのに役に立つに違いないが、受講者がおそらくオンライン翻訳ソフトもオンライン辞書とカテゴリーとして扱う危険性があり、頼りすぎる場合、語彙レベルでは暗記への妨げ、文レベルでは語用論の練習不足につながるといえるだろう。「各自の工夫が重要」という指摘に関して、更なる説明がなかったが、自律学習を指すと解釈できる。その場合、自律学習できる学習者なら問題ないが、より支援を必要とする学習者もいる。さらに、たとえば、「話す」科目授業外の自律練習の相手を探す困難などが考えられる。特に海外にいる学習者のみでなかなか解決できない問題である。しかし、そのような学習者支援の課題が本報告の範囲外である。

最後に、「＊」が付いている表面化しにくい項目について述べる。キーボードの予測機能を使うと文脈に正しいと思われる漢字が自動的に提案され、文法的な間違いが修正されるなど、一般ユーザーにとって役立つ機能だが、知識が試されるテストやクイズ、または宿題や課題では、スキルの力が正しく測れなくなり、学習者自身も含め、歪んだイメージを持つようになるというネガティブな解釈がある。学習者も“cheat”という単語を使ってコメントを残し、後ろめたい気持ちがあるようだ。さらに、「さぼるのがより簡単になった」というコメントが、更なる確認が必要だが、授業中に、特にカメラをオフにしている際、授業と関係ないことをマルチタスキングする受講者がいると解釈ができる。受講者ら自身も指摘する集中力の低下や授業内容の定着度との関連が今後の課題であろう。

オンライン授業が好評にもかかわらず、表８からわかるように学習スタイルの変化に関する否定的なコメントが肯定的なコメントを上回り、図４の結果を裏付けるものだと考える。要するに、科目や学習内容によって異なる授業形態が望ましいということである。

３．８　自由回答について

アンケートの自由回答欄に授業に関する感想を書いてもらった。３学期分のコメントをまず、肯定的・中立的・否定的なものに分類し、その比率を表９にまとめ、代表的なコメントの１部をまとめたものが表１０である。自由回答のため、アンケート回答者全員からコメントがあったわけではなく、肯定的なコメントと否定的なコメントの両方を書く回答者もいたためパーセンテージを出すことが困難である。そのため、各学期の授業に対するコメントの肯定的・中立的・否定程なものに分類し、学期ごとにそれぞれの比率を表示することとした。

表９からわかるように、2020年度春学期に肯定的なコメントが非常に多く、中立的および否定的なコメントが少なかった。ヴァンバーレン（2020：50）にも指摘されている

ように初めて授業がオンライン形式となったことによる「新しい授業形態の新鮮さ」が影響しているであろう。2020年度秋学期には、比率として肯定的なコメントが減少したにもかかわらず、中立的および否定的なコメントを上回っている。また、オンライン授業形態となった第3学期の2021年度春学期では、肯定的なコメントが増加したとともに、中立的なコメントの増加も目立つ。オンライン授業形態に慣れ、受講者が状況をより客観的に判断できるようになった現れと解釈できる。

表9　自由回答（授業に関する感想）（比率）

	2020年度春学期	2020年度秋学期	2021年度春学期
肯定的なコメント	5	1.5	3
中立的なコメント	1	1	2
否定的なコメント	1	0.5	1

担当教員への感謝の気持ちや教材の評価、コロナ禍でもオンライン授業形態によって受講が可能になったなど、肯定的なコメントが3学期分のアンケートを通してみられた。中立的なコメントとして、授業へのオンライン実施への理解とともに課題の負担への配慮の必要性が挙げられる。そして、通信速度や、クラスメイトとのつながりや交流不足、時差などが主な否定的なコメントとして浮かび上がった。

表10　自由回答（授業に関する感想）（代表的なコメントの1部）

	肯定的なコメント	中立的なコメント	否定的なコメント
2020年度春学期	・**海外から**受講が可能 ・**効率**がいい ・教材が分かりやすい ・内向きの性格でも参加しやすい ・オンラインツールが利用可能	・よかったが**課題の負担**が大きい ・よかったが科目間の**統一性**がない ・科目によって対面がいいが現時点で授業ができるだけでもありがたい	・**モチベーション**維持が困難 ・友人と**つながり**が困難 ・科目によって練習が困難
2020年度秋学期	・**時間**に余裕ができる ・**たのしい／おもしろい** ・担当教員がいい	・対面とオンラインの**両立**が望ましい	・LMSでの情報が不十分 ・**通信速度**でオンライン授業にアクセス不可
2021年度春学期	・**交流**ができる ・担当教員がいい	・オンラインは悪くないが**課題の負担**を考えてほしい ・対面とオンラインの**両立**が望ましい	・**時差** ・教科書購入 ・**交流**が難しい

4．まとめと今後の課題

本報告では、2020 年度春学期からスタートした CEGLOC 日本語教育部門のオンライン授業に関して 3 回にわたって行った受講者対称のアンケート結果の報告および比較を行った。回答者の負担を減らし、今後の適切な授業形態を探るために、不要な項目を削除したり、新項目を設けたりしたことによってアンケート内容を随時に調整してきた。

アンケート結果として次の点が明らかになった。まず、よりユーザーフレンドリーな機器の所有率が徐々に上がり、受講者の授業環境が 2020 年度春学期より改善した。同様に、出版社の協力および教員の工夫によって、教科書購入がそれほど困難ではなくなった。しかし、クラスメイトとのつながりが依然として課題として残る。今後の望ましい授業形態については科目の種類や特色にもよるが、全体的にオンライン授業の評価が高いため、パンデミック終息後にも、対面式授業とオンライン式授業の両立を求める声が多かった。そして、開設希望科目にはビジネス日本語・アカデミック日本語・文化への希望が目立った。すでに存在する日本語コースの内容強化とともに、受講の多様化に合った教材作成が大きな課題となる。

謝辞

受講者数推移のデータをまとめてくださっている CEGLOC 日本語教育部門の支援スタッフ、そして形態に関係なく熱心に授業をしてくださり、受講者にアンケートを案内してくださった教員全員に感謝を申し上げます。また、正直な気持ちを聞かせてくれた受講者にも感謝を申し上げます。

参考文献

ヴァンバーレン　ルート（2020）「2020 年度春学期緊急的な遠隔授業のアンケート報告」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』第 36 号：43-53

外務省（2021）新型コロナウイルス感染症に関する水際対策の強化に係る措置について。https://www.mofa.go.jp/mofaj/ca/fna/page4_005130.html（最終閲覧 2021 年 10 月 6 日）